

「母の畑」

市川中学校 二年 宮川 可愛

「どうしてこんなに育つの。」というのが私の感想だ。

母は、自分で十分すぎるほどの野菜を育てている。それなのに、近所の畑の知らないおじいさんからも野菜を受け取る。我が家では消費できないのに、無意識に追い打ちをかけてくる。恐ろしい母だ。

母が農作業を本格的にするようになったのは、去年だ。物価高で店のものが簡単に買えなくなり、

「自給自足して、たくさん野菜を作れたら売れるんじゃない。」

と言う母の言葉がきっかけだった。そこで母は、私の祖父の家にある、家が二軒ほど建てられるぐらいの広さの畑を借りて、野菜を育て始めた。

去年育てたものは、スイカ、メロン、トウモロコシ、スナップエンドウ、玉ねぎなどだ。春は入学したてで、畑仕事をする体力がなかったが、ゴールデンウィークのあたりからは、妹と一緒に手伝うようになった。ちようど収穫が近いスナップエンドウを見に行ったら、うどん粉病になって葉が枯れそうになっていた。母はそれに酢を混ぜた水をスプレーにしかけた。二日後にもう一度見たら、何事もなかったように元通りになっていた。人が葉を飲んで治るように、植物も同じことができるかと知って、改めて

植物も生きているのだと感じた。また、食べてもらうために本やネットで、病気の対処法や効率のよい育て方を調べている母を尊敬し、誇らしいとも思えた。

夏にはトウモロコシに力を入れた。だが、私達が植えた本数だけではうまく受粉できずに、粒が点々としていた。その失敗から母は、

「来年は、じいちゃんが百歳だからその記念にトウモロコシ百本植えよう。」

などとノリノリで話していて、切り替えが早いなど思いながらも、母のような前向きな考えができるようになりたいと思った。

冬には玉ねぎを育てた。私は、つまようじよりも細い苗を一つ一つ取る地味な作業で活躍した。飽きるが、好物が畑にゴロゴロできているのを想像して頑張ることができた。だが、土の中にいるユガネムシの幼虫が玉ねぎの根を食べていた。予備の苗も全て枯れて、母も私もこれからは容赦しないと誓って、こういった害虫は、バケツの中で溺死させるルールができた。そして今年も、去年と同じ野菜と、レアな野菜を育てている。一つは、中がパイナップルのような黄色をしたスイカ、一つは白ナスだ。スイカもナスも、幾つかは枯れてしまうのを考慮して植えたが、なぜかほとんど枯れずに成功した。今年の夏は運が良いのか他の野菜もできている。美味しいが、量が多いので、知り合いや親戚に配って何とか消費できている。

私は、何かを根気強く育てたり、作ったりすることが苦手だ。しかし、毎日のように畑に行くと、野菜の成長具合を自慢する母を見て興味をもち、手伝うようになった。毎日手伝えるわけではないが、おすそ分けで渡すときに喜んでくれる様子を見ると、同時に私も嬉しくなる。野菜などの長く手間暇かけたものに対して喜んでくれる人がいると、「やってよかった。」また手伝いたい。」と思える。私は、野菜を育てるには種や苗、栄養だけではなく、それを虫や鳥から守るための薬や、野菜同士の植える組み合わせ、そして人の手間暇が、野菜を育てるために必要なことだと感じた。それは、魚や肉など食べる物全てに当てはまることだろう。これらを踏まえて、食品の食べ残しが、どれだけ人の苦勞を無駄にしているのか、全ての人に一度だけでも考えてほしい。